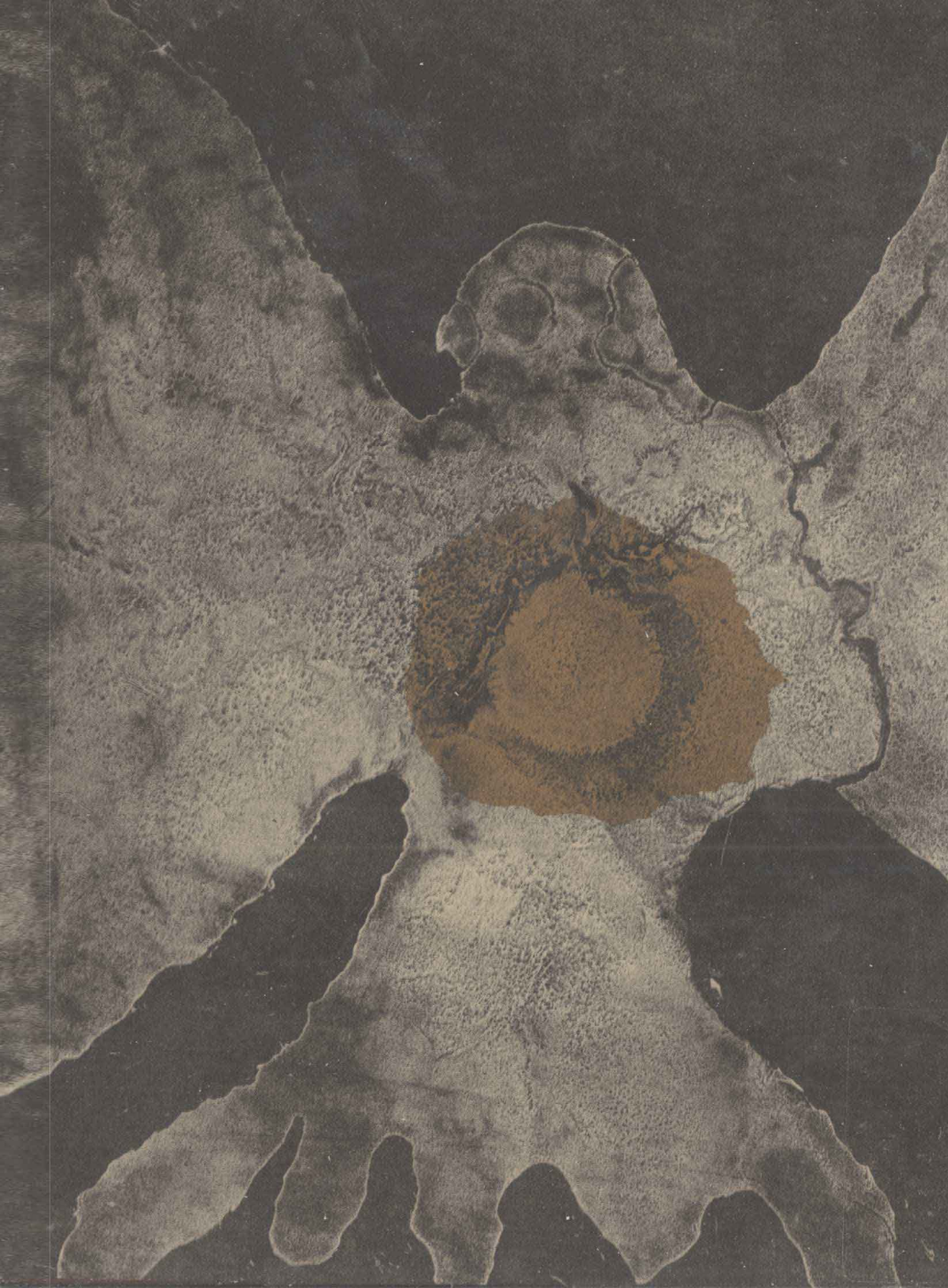

白土

武田泰淳

中央公論社

富士

定価二五〇〇円

昭和四十六年十一月七日初版発行
昭和五十五年四月五日十三版発行

著者　武田泰淳
発行者　高梨茂
印刷者　山元悟

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央區京橋二ノ八ノ七
電話（五六一）五九二一
振替東京二一三四
©一九七一
検印廃止

目

次

序章　神の餌　7
一章　「草をむしらせて下さい」　21
二章　美貌青年と哲学少年　43
三章　一の日、八の日　72
四章　「私、させられているのよ」　93
五章　誘惑　119
六章　まぼろしの鳩　147
七章　「あの子が死んだ。あたしも」　170
八章　あいまいで明確な悪夢　200
九章　嘘言症患者の妄想、あるいは真実の手記　223

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

十章　「愛をもって接しなさい」　247
十一章　くりかえしの恐怖　267
十二章　「勇ましく進め」　286
十三章　虹のわかれ　306
十四章　「相手の存在を失わせる」　323
十五章　事件の発生、その直後　351
十六章　「一条さんがやってくるわよ」　369
十七章　肉の裁き　390
十八章　予感、戦慄、奇蹟　404
終章　神の指　439

題字　武田泰淳
装幀　司修

富

士

序章　神の餌

リスの尾の方がリスの顔つきより、感情をよくあらわしているにちがいなかった。

あたまの上まで尾を折りかえして、パンをたべていたリスと、長い尾をそのまま雪の上に敷いて食べるリスとでは、ずいぶん性格もちがうだろう。だが、私はいつも、一匹のリスが気分によって尾っぽのとりあつかいをちがえるのか、それとも、二匹の別のリスが習性として、ちがった尾のとりあつかいをするのかわからなかった。

小鳥となれば、さっき来た小鳥と、今来ている小鳥とがなかなか区別がつきかねるけれど、リスの場合も、姿を見せるのが単数か複数か見きわめにくいのは困ったことであった。

それでも雪の白さの上のリスの動作は、わかりやすい。

春のリスの方が、秋や冬のリスより痩せて色つやがわるいように思われる。

もう陽が射しかけはじめている。細い雑木の細い影が雪の上に、それほど黒くない黒さでのびている。

小鳥がパンをついばみに来ていても、リスはむろんかまわずにやってくる。そんなとき、小鳥の方が平気である。あんまり近く、つまり同じ場所にまでリスが跳ねてくれば、身をよけるけれども、小鳥の方が一つ位置にとどまって、おちついてたべている。

木の根もとだけ、雪の面がくぼんでいる。あまり背のたかくない雑木の上の方から、陽が射しかけはじめる。すでに芽ぶいているうす緑いろの芽のツブツブが、陽のさしかけた部分だけ、ほんとうの色を示している。ほかの部分は、そんなこまやかな色の本質、変化にかかわりなく、ただ灰色の線のままである。

雪の中の花ざかり。それは、めずらしいことであった。

リスの尾がふさふさと厚みのあるように見えるときもあり、尾の髄のまわりに生えた毛がすいて見えて、いやにたよりなく見えることもあり、それが温度や光線のかげんで、同じリスの尾がそう見えるのか、それともちがったリスのちがった尾だからそう見えるのか、私にはたしかめられない。

石油ストーブに陽がさしかけはじめると、唐紙に、ストーブのまわりと上部に立ちのぼる熱気（空気の流動というのだろうか）がうつることがある。もっと強い陽が射しかければ、その影のもやもやしたうごきは消えてしまう。また戸をしめきっていれば、そんな現象がストーブのまわりに起っていることは知らないでいる。ずっと高みにある松の枝の影が唐紙に、もやもやより濃くうつりはじめると、そのもやもやの影は見えなくなる。

リスにとっては、一本の木から他の木へ横ざまに跳びうつるのが、一本の木を縦にのぼると同様に自然なルートではないだろうか。

イタチが来た。リスよりも毛がふくよかで、首の下など皺がよるほど毛がゆたかだ。リスとイタチの区別がやっとわかってきた。イタチは地をはうようにして、長い身体を低目にかまえてすべりよってくるのだ。

リスはやはり、二匹だった。松の幹は、皮がけば立っているので、爪の音をたてやすい。バリバリと音のする方に目をやると、たしかに別々の松の幹を、別々のリスが上ったり下ったりしていた。私が、ベランダの椅子の上で、葡萄酒にむせて、ヘンなのどの声を発して、葡萄酒をふき出したので、彼と彼女の活動は止まってしまったけれども。

トゲトゲの木の細枝に芽ぶいた芽のツブツブの方が、おっとりとやわらかいトゲのない木の細枝に芽ぶいた芽より繊細のような気がする。トゲのない木の方は、なるほどやわらかそうであるが、だらしないように見える。

さっき別荘銀座の方を歩いていたとき、ブルドーザーでかき残された雪が、あの小豆や青豆の入った豆

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

平糖、あの砂糖菓子の色でコチコチに凍っていた。そして、ゴム靴がすべって手袋をはめてない手が傷ついたらしい。リスとイタチと木の芽に見とれていて、気がつかなかったのに、電気ゴタツにもどったらピリピリと痛くなった。傷といえないほど小さいが、それでも濃い赤色と、黒みがかった紫色の点とスジが、三本の指の上半部についていた。それに、インキのしみもついているので、寒さで赤らんだ手ぜんたいが妙な色どりになった。

保護色がいいか警戒色がいいかと言えば、山の路をあるいているとき、私たちは警戒色をハッキリさせた方がいいと思う。それに手袋と帽子も、はめたりかぶったりしていた方がいい。猟師が霰弾を放つころは、ほかの土色や灰色と区別できる、あきらかな色を身にまとっていないと、動物とまちがえられるからあぶない。正月の雪がまばゆい朝、猟銃の音が耳のそばでひびいた。遠くの下の方に、カンジキをはいた銃手たちが走りまわっていた。私と妻と娘は、ほんとうにこわかったので「あんなに射って、あぶないなあ」と私がわざと大きな声で言った。すると、そのたくましい山男たちの一人は「なんだってえ。そっちへ向けて射ったかよう。そっち向けて射っちゃいねえだろ」と、遠くの方から大声で叫んだので、私たちはだまって、おとなしく彼らを見守り、やがて見守ることもやめにしてしまった。彼らが怒り出したら、どんなことをされるやら、わからないからだ。

その二匹のリスは、かならずしも仲良く共同生活をいとなんでいるようにも見受けられないことがあった。餌をついばむとき、二匹はてんでんばらばらに動き、二匹がよりそって一ヵ所で静かに食べることがない。あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、あわただしく無関係に走りまわり、別々の場所へよけたり避けたりして、めいめいが食べているのであった。イタチの通った路を、なるべく警戒してよけて通ることは不思議ではない。縦にまっすぐにイタチがベランダに近寄ってきたあとでは、リスはたいがいその直線のあとをたどらないで、横に、遠くわたって行く。彼らにとり椅子も樹木も同じものである。

夜明けの霧の中のさくら。まだうすぐらい朝の霧につつまれて、かえってさくらの花、花のむれがきわだって白くあざやかに見えるのだった。ほんの小さい、大きな草ぐらいの、背のひくい株についている、

ほんのわずかな花も、おやこんなところにと気がつくのであった。ようやく小鳥たちが、鳴きかわしはじめ、その声は高いので、その方に気をとられながら、花の白さにもまたぼんやりと目うつりがして、霧はさほど、ぬれてこないのであった。

あまり太くないさくらの幹や枝も、ほかの雑木の幹や枝と、かわりなく、風にもゆれず、しずかにまじって仲間入りしているだけなのに、点々とついている白い花のため、それとわかるのだった。もうリスが来ている。熔岩の赤さや黒さ、色のちがいもまだはっきりしてはいないので、リスの色は岩の色とかわりなかった。インスタントラーメンが撒いてあるのに、それはあまり気に入らないかして、食べようとしないで、ただ岩から岩へとびうつったり、はねまわったりして、どこかへ行ってしまう。

あまりリスにばかり注目していると、そのうすぼんやりした明るさの中では、小鳥まで小さなリスのように見えてくる。小鳥も実はリスとあまりかわらない、すばやいうごきをしているからであろう。白樺だけは、霧の中でもいくらか白い。もしかしたらふつうのカンバの木が白樺に成って行くこともあり、白樺がふつうの灰白色のカンバの木に変化することがあるのかも知れないと、非科学的なことを考えたりする。他の鳥の声がしなくなってもピョロッピョロッと、一ヵ所で鳴きつづけている鳥もあった。ほかの鳥がほかの場所へ去って、いなくなっているのに、その小鳥だけがまるでその地点にすがりついたように、さえずりを止めないのをきいていると、それでいいのかなと考えられてくる。ピョロッピョロッ、ピイッピョロ。

炊事場の窓、二階の寝室の窓からのぞくと、さくらの花が目の前にあって、おどろかされる。おどろかされたいため、わざとそうすると言えば言えるけれども、それにしても、やはりその度に新鮮なおどろきを正直におぼえる。

さくらの木と他の木が、あんまり似ていて、よりそうように、お互いにじゃまするように立っているので、他の木にさくらの花が咲いているように見えることもあった。うかび上った白い点、ちらばったような、まとまったような白い点がそよぎはじめる。まだ、霧は少しも去らない。

「明るい農村」の番組がおわった。山形県の温泉の籾の芽だし作業。愛媛県の酪業ヘルパア。新潟県の毒消し売り。学者の解説や意見より、農民のはたらいている姿の方が、自然に感じられる。

朝が明けきったのに、霧の白さが少しもうすれないのは、それだけ霧が濃くなっているからだ。鳥の声もしなくなった。さくらの色は少しでもあかるくなっただろうか。うすもも色も少しは見えはじめているけれども、まだほんとうの「彼女」自身の色がすっかり見えているわけではない。

もう一度たしかめたくなって、山靴をはきステッキを手にした。家の中の坂をのぼり、家の外の坂を左へくだる。道のまん中だけ、霧が濃いように思われるのは、そこは雑木の枝の影がなくて、霧だけたまっているようだからだ。足に力をこめねばならぬ急なくだりで、両側にやはりさくらがあった。どうしようもなく枯れて倒れかかった、老人くさいボサだったのに、やはりそれが白い花をつけていた。さくら色という形容をつかわないで、桃色と私は言いならしてきたが、こうまでどこにもさくらの花が霧の白さにかすみながらはっきりしているのを眺めながら歩いて行くと、やはりさくらの花をさくら色と言ってもかまわないような気がした。

黒い焼け砂の斜面は黒いままでなだれかかっているが、道をはさんだ低い斜面のトゲの木や野バラ、赤みがかって長くまいたつるの木や、白くかわいた去年のすすき、または真直ぐのびた月見草の向う、その下にさくらがさいていた。左へ折れて、また登りにかかる。そのあたりには泥の表を細く盛りあげ、モグラの走ったあとがあった。

細い枝が四方に茂っていて、よく見るとそれにも枯木らしいさくらの、長くのびた枝のはしっこに白い花のついたのもあった。「あんた、おききなさい。私が啼いてあげます」と言いたげに、いきなり耳のそばでウグイスが見事すぎるほどの鳴き方で啼いた。

「あそこまで行って見よう。あそこにはまさかさくらがなかったはずだが」と、もう少し行くと、雑木のしげみのうしろに、やっぱり白い花がうかんでいた。柏の葉、魔術師の老婆の大きな手のひらのような茶褐色の葉のかげに、かくれ咲いている花もあった。

枯れかかった雑木の、ほんのわずかな部分にやっとしがみつくようにして、咲いている哀れな花があるので、近よって見ると、実はそうではなくて、枝ぜんたいに勢いのよいつぼみがふくらんでいるのであった。空は霧いろの壁のようにひろがっているのだから、空は見えないと言ってもよいのであった。したがって、あたり一面、かくれるように、ひかえ目に咲きみだれている花が、空にうきあがって見えるということはないのであった。青い空なら空といえるけれど、空と地面が一つにつながっているのだから、花は空を知らないで、ただ咲いているのであるし、もしかしたら「咲いている」と言われるのをいやがるように、それこそ「ほころびている」と言った方がいいのかも知れない。

雪が消え、さくらが散りはててから、リスの往来が目立ってきた。私たちの庭に撒いた餌だけをねらって、自分たちの力で林の中で餌を探すのを止めにしてしまったのかも知れない。

テレビをかけてあっても、私たちの話し声がきこえていても、あまり恐れなくなった。一度など、ベランダを渡ってきて、ガラス戸にかるくぶつかり、どうしてぶつかったか不思議がるように、室内をのぞいていた。人声がするときこそ、餌が豊富なのであるから、むしろ人声のするのにつられて近寄ってくるらしい。

私は「リスは可愛い」と思わないように努めている。可愛いことを信じたくないと言うより、「可愛いわ」と言う女性や子供の感情が信用できないからだ。「可愛いわね。ほんとに可愛いなあ」と、むやみにくりかえすことで、可愛いという感情をたっぷりもっている「いい人」らしく見せるのはきらいだ。ほんとうに可愛いと思って可愛いと言わずにいられないにしても、もう少し反省というものがあってもいいような気がする。しかし私だって実は、ときどき可愛いと感じて見とれてしまうのである。

というのは、ネズミが可愛くなくて、なぜリスが可愛いかという問題（まあ、それほど大げさではないが）が、私に降りかかってきた（浸みこんできた）からである。

山の家のネズミは小さい。にくらしいほど大きなネズミなど、一匹もいない。日本の山岳地帯に特別に

棲んでいるヤマネかと思うが、そうではないのかもしれない。ヤマネの別名は、芸者ネズミと称する（これも、まちがっているかも知れないが）から、まことに繊細で、ネズミ好きの人なら、愛玩用にしたいくらいのものであろう。ヤマネでないとすると、野ネズミということになるが、山野を荒して農民を困らせる勇猛な野ネズミとは、たしかに種類がちがっている。とにかく、小さくておとなしい。おとなしくかくれていて、めったに姿を見ることもできない。だが、弱々しいかどうかとなると、どうもそうではなくて、なかなかつかまったり死んだりはしないのである。

うちのネズミとりは、針金製の箱の上部に丸い入口があり、その下に吊り下げられた餌（うちではチーズを使用する）をねらって、ネズミがそこから降りていくと、二度と登ってこれない、逃げ出せない仕掛けになっていた。つまり針金の尖端が下向けになっているため、入口は下すぼまりになっていて、いざ下から昇るとなると、針金が細い槍のようにかたまっていて、とても痛くて、通りぬけがむずかしいのである。

ある日、一匹がつかまった。つかまったらしい気配なので、のぞきに行くと見事に箱の中に捕えられて、出られなくなっている。「やはり、つかまったか。この箱の効き目はたいしたものだ」と思いながらも、つかまったネズミを、いつ、どうやって殺すか、それを考えるのがめんどうくさいので、責任のがれをするように、そのままにして寝てしまった。目がさめてから、またのぞきに行くと、すでに「彼」の姿は消え失せていた。

次の日には、入口の針金の尖端をもっとすぼめて「これなら、いくらなんでも痛くて脱け出せないであろう」と言う具合にしておいた。そして、また一匹かかった。「よくかかるな。よっぽどチーズが好きなんだろうな」と思いながら（そうは思っても、はたして喜んでいたのか喜んでいなかったのか、自分でも判断がつかなかったけれども）、私は寝てしまった。そして目がさめるが早いかたしかめに行くと、またしても「彼」の姿は箱の中から消え失せているのであった。

そうやってネズミとりに熱中している一方、私、私たちはさかんにリスに餌をくれてやり、リスをつか

まえる気持など全くなしで、リスを可愛がろうとしているのであった。そのようにしてリスとネズミの両方にかかずらっていると、さほどこまやかに観察しないでいても、リスとネズミがはなはだ似ている動物で、一挙一動、見れば見るほど同族のように思われてくるのであった。

たしかに、室外のリスと屋内のネズミは、おたがいに愛しあいも憎みあいもせずに、無関係に暮しているにちがいなかった。それだのに私、私たちは片一方を生かしてやろうとし、もう片一方を生かしてやるまいとしているのであった。

ゆでる前の干うどん、スパゲッティをポキポキと短く折ったような形の殺鼠薬。それは、ピンク色をしていた。もっと古風に桃色と言いたい、素朴な田舎風の色をしていた。その殺し薬を、暖炉の上の皿などに載せておくと、「彼ら」が食べたらしくて、薬の数は減じて、あたりに散らかっていた。しばらくたって暖炉の上の麦藁帽子を見ると、そのへりに桃色の断片が運ばれていて、帽子のてっぺんの凹みの中にまで、ちゃんと置かれているのであった。そればかりでなく、炊事場の棚の徳用マッチの大箱の中にまで、その桃色の断片がはこびこまれてあった。マッチの棒のアタマも赤い色をしている、その色と少しはちがうが、やはり赤の一種である固形の薬が、おびただしく運びこまれ所蔵されてあるのを眺めると、ゾッとせずにはいられなかった。「彼らは一体、それを食べたのであろうか。それとも、いたずらをして運びうつしているだけなのだろうか」

ネズミの死体は一回も発見されはしなかった。「食べたらしいぞ」と考えて、桃色物体を補給しておくと、それもいつのまにか消滅しているのであるが、それだけ、他の場所で（ネズミの死体ではなくて）桃色物体が発見されることが多くなるばかりなのである。

「ネズミの心理はわからない」と妻は日記にしるしているが、そもそも心理などという言葉をもちいるのが、そのもちい手の心理を疑わせる、気持のわるい事態であるにちがいない。ネズミの心理。ああ、私、私たちはほんとうは、そんなものはよくよく考える必要もないし、考えたって考えつくせるはずのないことを、前もってすでに感じとっているはずなのに。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com